

社会福祉法人
日本医療伝道会
Japan Medical Mission
http://www.kinugasa.or.jp/

KINUGASA 衣笠

Volume. 40 Issue. 5

～「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」マタイによる福音書25章40節～

第422号



湘南国際村クリニック
医師 大友 宣

みなさんは在宅医療というこ
とばをご存知でしょうか？いま
まで医療は入院医療と外来医療
のふたつが主なものでした。外
来は通院できる方が来院して、
検査したり、処方をもらったり
します。難かしかったり、危険

在宅一念 在宅一年

をとまなう治療や検査があつた
り、動けなくて通院できなくな
った場合には入院してしまし
た。人生の最後のときにもほと
んど病院に入院して過ごしてい
ることが多くなっていました。
末期ガン患者の人生最期のとき
に安心して苦痛を少なく過ごす
ことができるようホスピスがあ
ります。
衣笠病院グループの中の一
つである湘南国際村クリニック

では、昨年十月から訪問診療を
本格的に始めることになりました
た。訪問診療は入院でも外来で
もない三番目のかたちの医療で
す。そして、その目的ややり方
はおのずと違ってきます。湘南
国際村クリニックの在宅医療で
大切にしていることがいくつ
かあります。特徴とも言えること
と思えます。
はじめに、在宅医療は生活を
支える医療です。病院の外来や

入院では病気を診断したり治療
したりすることを大切にしてい
ます。もちろん診断と治療を無
視するわけではありませんが、
在宅医療で大切な目標は「生活
を支える」ことであると思いま
す。病気を持った患者さんが自
宅で療養ができる、自宅で安心
できる、自宅で苦痛なく過ごす
ことが大切だと思います。
二つ目に、わたしたちはグル
ープ診療を行っています。通常

は訪問診療や往診を一人で行っ
ている先生方が多いように思
いますが、わたしたちは二十四時
間対応しやすくするため、患者
さんを継続して見続けるため
に、グループ診療を行っています
す。現在は三人の医師（天田・
大友・金井）が診療にあたつて
います。将来的には一人で頑張
っている先生方を支えることが
できるようにになりたいと思っ
ています。



三つ目に、適切な場所での診
療を行います。なるべく在宅療
養生活を支えることができるよ
うに診療しておりますが、患者
さんによっては在宅療養を続け
ることが難かしくなったり、一
時的に入院が必要となる場合が
あります。わたしたちは「在宅」
であることに固執せず、柔軟に
対応したいと思えます。幸い、
わたしたちのグループには病院
もあり、老健もあり、特養もあ

ります。デイサービスもショ
トステイのサービスもありま
す。グループ内外の資源を活
用して患者さんを支えていけ
るようにしたいと思います。
訪問診療の患者さんのなか
には、癌やその他の病気のため、
自宅で最期を迎えられる患者さ
んもいらつしやいます。わたし
たちの大きな仕事のひとつに
は、在宅ホスピスケアがありま
す。患者さんがご自宅で最期を
迎える場合、できるだけ症状を
和らげる治療をすること、安
心して家族が看病できること、生
活の中で治療することが求めら
れます。また、わたしたちクリ
ニックの仕事だけではご自宅で
最期を迎える方々を支えること
はできません。訪問看護師、ケ
アマネジャー、訪問介護、訪問
入浴、急性期病院、薬剤
師・・・たくさんの職種の人た
ちがチームにならなければなり
ません。わたしたちは、患者さ
んやご家族が望めば、ご自宅で
最期を迎えることを支えたいと
思います。現在は病院で亡くな
る方が全死亡数の八割以上とい
われています。わたしたちは安
心してご自宅で最期を迎えるこ
とができる地域づくりをしてい
きたいと考えています。

した。衣笠病院グループ! 共に歩む～

お元気ですか?! 地域の皆さん
衣笠病院グループはご高齢の方々が
安心して生活できるための事業を二十
年前からおこなってきました。さらに
二〇〇〇年の介護保険制度開始によっ
てご自宅でお過ごしいただくための
サービスの充実が求められ、新しい事
業を展開してまいりました。

衣笠病院グループでおこなっている
在宅サービスの歩みを振り返るとき、
その歴史と役割を再認識し、地域の在
宅サービスの拠点としてご利用者のニ
ーズに定める事業展開となっているか
を改めて問われます。

超高齢化社会に向けて、ご自宅で
家族と安全に、安心して過ごしてい
ただくために、今後ますます介護を支え
る手が求められることでしょう。衣笠
病院グループは「全人介護・全人医療」
を運営理念とし、地域の在宅サービ
スの拠点としての役割を担ってまい
ります。



衣笠病院ケアセンター
衣笠病院長瀬ケアセンター
事務長
柳井芳明

(%)
30

25

20

15

10

2000年

衣笠病院ケアセンター
衣笠病院久里浜ケアセンター
衣笠病院浦賀ケアセンター
(介護保険制度施行)

◎居宅介護支援事業所

訪問介護サービスをはじめとし
たサービス調整のみならず、地域
コーディネーターの役割の一端を
担う目的で1999年8月に衣笠病
院の医療ソーシャルワーカーと訪
問看護ステーションの介護支援専
門員の資格をもつ3人でスタート
しました。

◎訪問介護

訪問介護ステーションでは、ご
利用者の方々が住み慣れた地域、
そしてご自宅において快適な生活
をするために必要な介護(身体・
生活)のサービスを提供いたします。

◎福祉用具

ご自宅で快適に過ごすことがで
きるように、体の状態に合わせて
使いやすく工夫されたベッドや車
椅子をはじめ、それらの周辺機器
をケアプランに基づいてご利用い
ただけます。



1997年～1999年

衣病訪問看護ステーション
(久里浜・浦賀)
訪問入浴・地域リハビリテーション
衣笠病院在宅介護支援センター
(久里浜・浦賀)

◎訪問入浴事業所

衣笠ホームで1999年に活動
を開始いたしました。ホームの芦
名移転に伴い、在宅部門を衣笠の
地域で継続したいということから
2003年10月より引き継いで入
浴サービスを提供しています。

◎衣笠病院(久里浜・浦賀) 在宅介護支援センター

横須賀市の委託事業で、市や地
域の皆様方と連携を持ちながら総
合相談窓口として、地域作りのお
手伝いをしております。

1996年

衣病訪問看護ステーション
1996年10月に、超高
齢化社会の到来、医療依存
度の高い方の退院支援、人
生の終末期を自宅で過ご
すためのお手伝い等、365
日24時間在宅療養生活を
安全に安心して送ってい
ただくための役割を果たす
べく誕生しました。

1987年

葉山町デイサービス

1987年6月から衣笠
ホームが葉山町の委託
を受け、集会所を利用し
て始められました。翌年
(1988年)にオープン
した葉山町福祉文化会館
の3階に移り、現在に至っ
ています。

昔もこれからも地域に
元気を与えられる温かい
サービスを提供いたします。



高齢化社会に対応してきま ～地域と



超高齢化社会

■超高齢化社会

高齢化率7%で高齢化社会、14%で高齢社会、21%を超えると「超高齢化社会」と呼ばれます。

前期高齢者（65歳から74歳）は、2015年までは増から減へ、以降、後期高齢者（75歳以上）が増加し、2050年には2200万人に達する予定です。今後ますます介護や医療を支える手が重要となってきます。

衣笠病院グループは、「全人介護、全人医療」をモットーに地域の方々の環境やご家族の状況等に応じたサービスを提供して行きます。

2007年度は

- ・葉山町デイサービス 20周年
- ・衣病訪問看護ステーション 10周年
- ・衣笠病院長瀬ケアセンター 5周年
- ・浦賀・久里浜第二地域包括支援センター 1周年を迎える年です。

2006年

浦賀・久里浜第二地域包括支援センター

2006年8月から横須賀市より委託され、『浦賀・久里浜第二地域包括支援センター』として専従3名体制で事業を開始しました。従来の在宅介護支援センター機能に加え、権利擁護やケアマネジャー支援、介護予防の拠点としての活動が加わり、行政と一緒に考え、悩み、動いた毎日でした。

2002年

衣笠病院長瀬ケアセンター

◎通所介護

「訪れた方が自ら選択」できる内容を追求しています。有意義な時間を提供するリハビリテーションやレクリエーションは個人の志向はもちろん、その日の気分や体調に合わせて選べるように、多様なプログラムを用意致しました。ランチバイキング形式を採用。さらに、カラオケやビデオシアターなど設備も充実。5階の展望風呂ではいつも温泉気分が味わえます。



■しみじみヘルパー川柳

真心が 必ず届く その笑顔

入浴介助 はがれた化粧が しわの中

ヘルパーは 人格磨けて 長瀬が一番

からだ 体格みて 頼りになると 喜ばれ

「ありがとう」 あなたの笑顔に 励まされ

訪問介護職員 の 作品

2025年 2020年 2015年 2010年 2005年 2003年 2002年 2000年 1995年 1990年

衣笠病院

病院機能評価 Ver.5での認定更新を受けました



院内統合情報システム室

病院機能評価受審準備室 主任 石井富美

衣笠病院は二〇〇七年七月二十三日付けで、日本医療機能評価機構による病院機能評価の認定更新を受けました。

病院機能評価とは医療サービスの質保証・改善を促進することを目的として設けられている日本医療機能評価機構による第三者評価の仕組みです。A病院の常識がB病院の非常識とならないような「質の標準化」を図るとともに、地域の方々の信頼を得て医療が良くなることを目的としています。この仕組みは五年ごとの更新制であり、二〇〇二年六月に認定を受けた衣笠病院は、二〇〇七年五月に「更新のための審査」を受けました。



三日間に及ぶ訪問審査では病院の医療安全体制、感染防止対策、医療・看護の質、病棟や外来の療養環境、地域との関わり、職員への教育・研修、病院の経営状況など五百以上の評価項目について審査を受けました。患者様が安心して医療を受けられる病院であるかどうかの審査です。積極的に患者様の意見を伺う「医療に関する患者・家族のための相談窓口」や「ご意見箱」の設置が評価され、診療体制では「医師、看護師、コメディカルの連携が良く、チーム医療が良く出来ている」との高い評価を受けました。

認定更新は、衣笠病院が掲げている地域の方々のための全人医療、患者様中心の全人医療という運営理念が形だけではなく、実践されていることが評価されたものです。訪問審査を終えて、サーベイヤー（審査官）からは「皆さんの努力がよくわかりました。これからも地域の病院として地域のために働いてください」という温かい言葉をいただきました。この言葉をしっかりと心に受け止めて、「安心してかかれる病院」であり続けたいと願っています。

三日間に及ぶ訪問審査では病院の医療安全体制、感染防止対策、医療・看護の質、病棟や外来の療養環境、地域との関わり、職員への教育・研修、病院の経営状況など五百以上の評価項目について審査を受けました。患者様が安心して医療を受けられる病院であるかどうかの審査です。積極的に患者様の意見を伺う「医療に関する患者・家族のための相談窓口」や「ご意見箱」の設置が評価され、診療体制では「医師、看護師、コメディカルの連携が良く、チーム医療が良く出来ている」との高い評価を受けました。

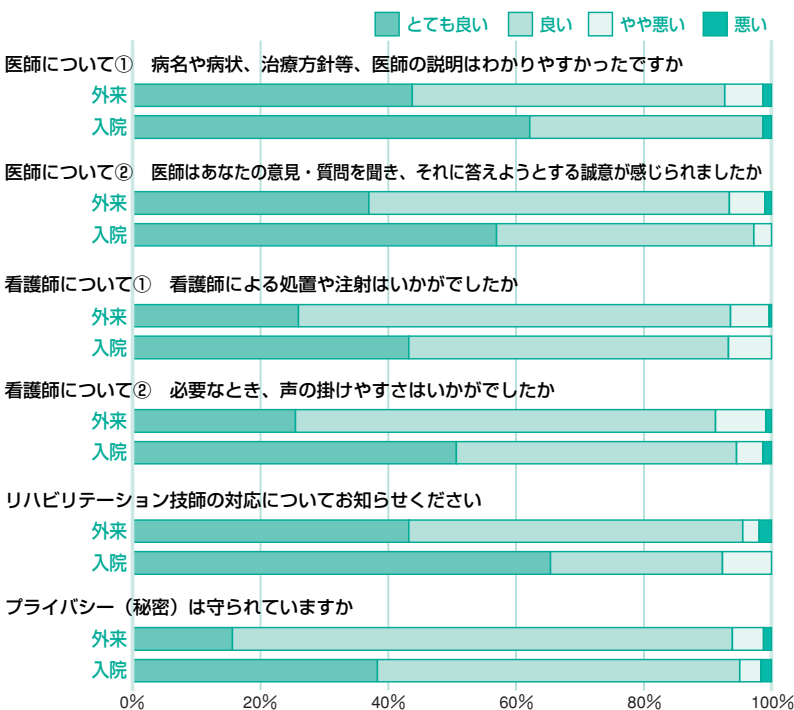
衣笠病院

2007年度第1回患者様満足度調査を終えて



看護部長
患者サービス向上委員会

委員長 森本武子



この度、衣笠病院は地域の方々に支えられ六十周年を迎えることが出来ました。創立精神に基づき、さらなる前進を、地域の方々から信頼される保健・医療・福祉の実践を目指し歩んで参りたいと思っております。

二〇〇七年八月二十日(月)から八月二十五日(土)までの六日間、患者サービス向上委員会主催で外来患者様と入院患者様同時に昨年と同様の形式で二〇〇七年度第一回患者様満足度調査を実施させていただきました。患者様、ご家族から多大なご理解とご協力をいただきました。皆様から寄せられました貴重なご意見を真摯に受けとめ、今後へ活かし、職員一同改善へと取り組み尽力して参ります。結果詳細につきましては、後日病院掲示板とホームページに公開いたします。

ホームページアドレス
<http://www.kinugasa.or.jp/>

歩こう会での新たな試み



健康管理センター 運動指導室
健康運動指導士 中村 修

春、秋を含めて、十四回目になる歩こう会を五月二十七日(日)に無事開催することが出来ました。今回の歩こう会は「病診連携」を大きなテーマの一つに、企画を進めていきました。当院の地域連携室から衣笠地域の各クリニックや診療所などに案内を出して、主治医の許可をもらった関心のある患者さんと一緒に歩き、運動によるいろいろな身体の変化を体感していただきました。

運動指導室主催で行っている歩こう会では、必ず運動前後に血圧測定を行い、その日の体調の確認も行います。数値が高めに出ている方に関しては医師や看護師により手動の血圧計で、測定をしながら確認をしま



荒崎海岸遊歩道

す。また、最近では随時血糖値と食後二時間血糖値の測定も行っています。測定は糖尿病療養指導士が行うので、参加者の方も安心して任せています。これらは、数値を目で見てすぐに分かるものなので、あまり関心のなかった方も、基準値と自分の数値を比べて確認をしています。この歩こう会がきっかけで、自分の数値に気づき、関心をもつていただければ測定した意味があると思います。また、運動の前後に測定することで身体の変化にも気づき、体感できれば、運動を継続することにより、生活習慣病の予防につながっていくと思います。

運動指導室では、歩こう会を普段の教室で行っている健康教育の実践の場と位置づけていますので、ただ楽しく歩くだけではなく、楽しさの中に何か気づけるもの、何かに感じて憶えてもらうものなどを織り交ぜていくように心がけています。水分を摂るタイミングや何気ない会話の中から歩き方のポイント、中間体操まではいかなくても小休憩の時にちょっとしたストレッチの実施など、その場その場で対応することにより、参加者の方も理解しやすく吸収していただけたと思います。当日の声か

けは、それだけ重要なポイントになり、歩こう会を行う「意味」というのもそこにあると思います。スタッフも健康運動指導士を始めとして、医師・看護師・糖尿病療養指導士・管理栄養士などさまざまな専門分野の方に協力をいただいておりますので、参加者の方もいろいろな分野の話を聞くことができ、いつも満足して帰られていきます。

歩こう会を成功させる為には、運

和田・長浜海岸へ



動指導室のスタッフだけでは難しく、他職種の協力があって初めて参加者の方にご満足いただけるものが提供できるので、衣笠病院グループとして、これからも協力しあい、よりよい企画ができればと思います。

最後に、いつもご協力いただいています関連部署の皆様、各企業の皆様にご心より感謝申し上げます。今後もしよろしくお願ひ致します。

聖句

病院創立六十周年記念式典における

感謝の祈り

衣笠病院 チャプレン 山田和人

二〇〇七年八月一日

天と地を創造し、そこに生きるあらゆる命あるものを愛し、祝福と平和とによってその命の営みを満たして下さる神さま。あなたのなされたみ業を覚え、感謝を捧げるとともに、心からの信頼をもってその栄光をほめ讃えます。

敗戦後の希望なき時代に、あなたはこの横須賀の地に、キリスト教の精神を基とした教育、医療、社会福祉の施設を建て、学びの場、癒しと慰めとを提供する場、そして、共に生きるために何が必要なのかを共に考える場を用意して下さいました。

衣笠病院がこの地域で診療を始めてから六十年間、多くの人々が様々な立場で、この病院の働きに関わってきました。経営の成り行きは定かでない時期を幾度も経験してきましたが、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのはわたしに

してくれたことなのである。」という

創立の精神をあなたの御心と信じて実践を続け、その働きの機会と場とを、創立当時は想像できないほどの規模で広げることができました。あなたは、その間、絶えずわたしたちの働きを支援して下さいました。

神様、かつてないほどに人々の魂が飢え渴いでいるこの時代に、わたしたちが神と人とに奉仕することを志し、温かいホスピタリティーを提供することに努めることができますように。見えざるあなたの手が、病み、傷ついている人々を癒し、さらに死の不安と恐れの中にある人々が、死に支配されない希望を抱き、その魂に永遠の平安を得ることができま

すように。言い尽くすことのできない感謝と願いとを、わたしたちの主であるイエス・キリストのみ名を通してお祈りいたします。アーメン

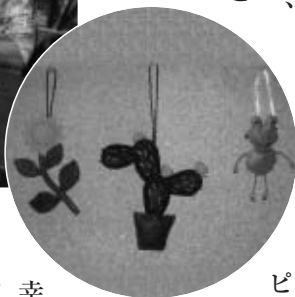
さりげない日常の風を

～ホスピスボランティア結衣～



ホスピスボランティア結衣（ゆい）は、一九九八年六月衣笠ホスピスの開設と同時に活動を始めました。現在五期生までが事前研修を受けて活動に入り、今年度の参加メンバーは三十六名です。「結衣」の名称には、この衣笠病院で出会う全ての人々とこの絆を大切にしたいという思いがこめられています。

私たちは、ホスピスの患者さんとご家族が少しでも気持ちよく過ごされるように、清潔に環境を整え和やかな雰囲気をつくるお手伝いをさせていただきます。毎日の仕事としてはホスピスを訪れる方の受付、生け花、キッ



ピンなどに整頓、ウエス作りなど。また毎月のコンサートを準備する「行事」、手芸品の製作販売の「バザー」、花壇を担当する「園芸」、患者さんと型染めを楽しむ「いこいの窓辺」等の各グループ活動も活発です。コンサートでは、ベッドや車椅子で目を閉じていらした方が音楽に合わせリズムを取ったり歌詞を口ずさんだりされています。随所に飾られた季節の花やバザーコーナーの可愛いマスコットを手にとって患者さんの会話がはずむなど、私たちは活動を通してさりげない日常の生活がどんなに大切かを学んでいます。結衣の活動は直接患者さんに接する機会は多くはありませんが、ホスピスに季節感や手作りの温もりが伝わり、患者さんと心を通わせ合うことができれば幸いです。

ホスピスケアチームの一員としてこれからは、日常の風をお届けするために、ボランティアがお互い支え補い合い、与えられた役割を真摯に果たしていきたいと願っています。

衣笠在宅のかわらばん「えんがわ」の紹介



湘南国際村クリニック
医師 大友 宣

今年の四月から衣笠グループの在宅サービスを利用していらっしゃる方々へ向けて衣笠在宅かわらばん「えんがわ」を発行しています。在宅サービスに関わっている職員のエッセイと、在宅に関するひとつくちメモが現在までの内容です。「在宅サービスにかかわっている人ばかりズルイ!!」って声も聞こえそうな気がしますが、安

心してください。「えんがわ」は衣笠病院の玄関やケアセンタ―前のマガジンラックでも配布しています。それでもダメなら、ぜひ、衣笠グループの在宅サービスをご利用下さい。ちなみに、あなたは「えんがわ」と聞いて、「寿司ネタ」と「ひなたぼっこ」どちらを連想しますか？



地域連携部
青柳 美美

「わ」を大切に
地域連携の「わ」は、『顔の見える地域連携』をスロ―ガンに掲げ隔月に発行しています。二〇〇七年の五月に創刊したばかりで、七月に第二号を発行いたしました。主に地域の開業医さんや患者さんに読んでいただけるよう、衣笠病院の医師の紹介や行事などを紹介しています。イラストや写真を出るだけでなく掲載し、カラー印刷でより親しみやすく、わかりやすい紙面を心がけています。この「わ」という名前も、『もつと地域に

広く輪を広げたい』という願いからつけた名前です。編集は取材から構成まで地域連携室を中心に行なっています。つまり素人による手作り編集ですので、拙い部分も多々あるかと思いますが、どうか長い目でみて下さい。皆様のご指導のもと、次号が楽しみな「わ」に育てていきたいと思っております。



沖縄旅行記



総務課
主任補佐 石渡 大輔

新婚旅行で沖縄を旅して以来、毎年かさず沖縄周辺の島々を旅している。沖縄民謡にも心惹かれ三線を習ったりもした。今年には波照間島へ旅をする。波照間島は石垣島から船で約一時間のところにある日本最南端の有人島。強い海流のため船は大きく揺れしばしば欠航することがあるが、その日は運良く航行していた。波照間の名前は「果てのうるま」に由来する。「うるま」とは沖縄の方言で珊瑚礁の意味。その名前からも連想されるとおり、島は美しい海に囲まれており、集落は昔ながらの赤瓦のたたずまい、サトウキビ畑が広がる風景、観光地化はされてなく独特の時間の流れを感じることが出来る。私は八重山諸島（石垣島周辺の島々をこのように呼ぶ）の中でも波照間島が大好きだ。一泊目は八重山諸島で有名な「たましる荘」に泊まった。個人的な主人のキャラクターもあり人気の宿である。横須賀市田浦の家を出てから宿に着くまで七時間程の道程だったが、休む間も惜しんで、宿から歩いて約十分程の「ニシ浜」という砂浜に向かった。途中の坂から眼下に広がる海はクリムソーダ色。潮流が早いため沖

には出ず、足が着くところで潜り、色とりどりの熱帯魚と泳いだ。ひとしきり泳いでからビールを飲んで昼寝をした。夜はその宿に泊まっている人と波照間島で作られている泡盛「泡波」を囲んで宴会が行われた。宴会では三線を持ってきた人の伴奏で民謡が歌われる。ほろ酔い気分の中、民謡が心地よく身体中を流れ、波照間の空気に染まっていく自分を感じる。

沖縄好きの人のことを沖縄病と言ったりする。沖縄病は一度沖縄を訪れたことが原因で発症する。初期症状としては、澄んだ空や海が見たくなる、琉球民謡を聴く、沖縄料理を頻繁に口にする。その症状を治すために沖縄に行くがそのたびに症状は悪化し、最後には「移住」まで考えるらしい。自分がその症例にびったりはまっていることを思い、さらなる深みにはまって行っていることに恐怖と快感を覚えつつその夜は更けていった。



Information from Kinugasa

■看護学生の臨地実習を受け入れ

衣笠病院では看護学生の受入を行っております。二〇〇七年度八月現在の実習受け入れ状況は、神奈川県立保健福祉大学一年生十名、二年生四十六名、横須賀市立看護専門学校三年生二十七名、湘南短期大学看護学科一年生二十二名、神奈川県立衛生看護専門学校第一看護学科六名、東邦大学医学部看護学科四年生五名、またホスピス病棟では見学実習を含め認定看護師研修など、今年度は約五七〇名の受入れを予定しています。また今年度初めて看護学生のアルバイト十名を採用しました。初日に比べ一週間もすると表情も豊かで患者様や職員とのコミュニケーションもよく取れており生き生きと働いておりました。アルバイトの指導には師長、主任、臨床指導者、看護師等が関わっており通勤時間が二時間近くの学生もおりましたが病欠などでお休みすることなくアルバイトを終了しています。患者様から得る物も多く、アルバイトは楽しかったと話していく学生がほとんどでした。夏期休暇終了後には実習で来院する学生もおります。夏休み期間中のアルバイトが学生の成長にどう影響したのか、実習で来院する学生に会うのが楽しみです。

ありがとう お疲れさま

～ 定年退職者のお知らせ ～



看護部 外来棟
准看護師
井上ハツ子さん
勤続20年4ヶ月



看護部 外来棟
看護師
長島あさ子さん
勤続21年5ヶ月



看護部 外来棟
准看護師
平野弘江さん
勤続22年6ヶ月

二〇〇七年九月三十日付で衣笠病院グループでは三人の方々が定年退職を迎えました。
これまでのお働きに心から感謝申し上げます。
これからも、お元気で、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

健康講座

- 11月 12日(月)
第68回 タオルを使ってストレッチング
14:00～ 講師 岩崎宏子
- 12月 10日(月)
第69回 血圧と上手に付き合う方法
14:00～ 講師 三井つた恵

*都合により日時などを変更させていただく場合がございます。

パイプオルガンミニコンサート

- 11月 24日(土)
第143回
15:00～ 演奏 吉川康子
- 12月 15日(土)
第144回
15:00～ 演奏 山口みどり

糖尿病教室11月、12月の日程は、都合により未定です。

記事中の写真は全てご本人様の承諾を得て掲載しています。

編集後記

厳しかった今年の猛暑も過ぎ、爽やかな秋風が気持ちよく感じられる季節となりました。
実りの秋、街のお店を眺めると、沢山の果物や新鮮な野菜が並べられ、新米の広告が張り出されています。

この夏、親爺の故郷である青森県津軽地方を旅しました。岩木山の麓の津軽平野は広く、林檎畑にはまだ青い大きな林檎がたわわになり、また岩木川の両側に広がる水田には緑の稲穂の絨毯が日本海まで敷き詰められ、海からの風に稲穂の絨毯が波打っていました。

農家の方の話では、大型の台風が日本海から直撃しそうになったが僅かに逸れ被害がなかったこと。
今頃は青かった林檎も赤く、緑の稲穂も黄色に色づき収穫の時を待っていることでしょう。

私たちも人生には様々な困難なことが多々ありますが、希望をもって収穫の時を待っていたと思います。
(M・A)

衣笠 第422号

〒238-8588 横須賀市小矢部2-23-1
社会福祉法人 日本医療伝道会

理事長 井口 延

電話 (046)852-6256(法人)

振替口座 00220-2-13963